事業概要書

事業名	気仙沼市唐桑町における地域活性化のための復興まちづくり事業				
開始日	2012 年 9 月 1 日	終了日	2013 年 1 月 31 日	日数	153 日
団体名	からくわ丸-Karakuwa Designers League				
（カウンターパート）					

スタッフ人数	全体 8 人（常勤スタッフ 5 名＋地元採用スタッフ（非常勤）3 名）人

CF 事業枠	2,953,000 円

事業目的	気仙沼市唐桑町において、住民が行政と連携しながら復興後のまちづくりに取り組んでいくための基盤づくりに取り組む。特に将来の唐桑を担う若い世代が地域の課題について協議し、それを行政と共有する機会や場を提供することで、彼らが今後のまちづくりに主体的に関わっていけるような体制を整える。そして活動を通じて唐桑の住民が「地域を守り育てていく当事者」としての認識を深め、将来的には地域住民の自治による持続的なまちづくりへとつながることを目指す。
事業全体の概要	●からくわ丸-Karakuwa Designers League（からくわ丸）とは からくわ丸は長期的な唐桑の復興・まちづくりを進めていくことを目的として、今年 5 月に設立された任意団体で、スタッフは地域内外のメンバーで構成されている。外部メンバーは昨年から唐桑において災害ボランティア活動に従事してきた首都圏の大学生（卒業生含む）が中心となっており、唐桑地域に移住し、地域で長く活動を続けるうちに巡り合った唐桑町内 20－30 代の若者達と一緒に震災後の唐桑のまちづくりについて考え始めたことが団体立ち上げのきっかけである。 現在の主な活動内容は、地域の魅力を再発見する「まちあるき活動」の実施や、まちの情報を伝えるコミュニティー誌「からくわ未来予報誌 KECKARA」の発行、復興支援ボランティアの受け入れとコーディネートなどで、活動を通じて学校や公民館、地域の商店の方々と協働で作業を行う機会が多い。唐桑町内にはからくわ丸の活動への理解者・協力者が多く存在するが、それはからくわ丸が地域住民との日々のコミュニケーションを大切にしてきた結果の表れであるとも言える。また、からくわ丸の主力メンバーが唐桑に残って活動を続けている大きな理由のひとつが、地域の人々が外部から来たからくわ丸のメンバーを自分たちの家族のように受け入れてくれたことであり、そうした地域コミュニティーの温かさに惹かれて唐桑へ再訪するからくわ丸のボランティアの数も多い。 まちづくりには 3 つの「もの」（＝「よそもの（外の視点）」「わかもの（若いエネルギー）」「ばかもの（何にでも取り組む実行力）」）が欠かせないと言われるが、からくわ丸の長所の 1 つは団体を軸としてこのような今後のまちづくりに求められる人材が周りに集まってくることである。

●取り組むべき課題

唐桑の歴史は古く、海に囲まれた地形により昔から人々は海産物を糧に生活文化を築いてきた。そのため、平安時代からの祭りの形態が伝統行事としても今も行われるなど、特色ある風俗習慣が根付いている。また近年は遠洋漁業が盛んで、1年以上に渡る遠洋マグロ漁から戻った漁船員が競うように建てた唐桑御殿（入母屋作りの家屋）は唐桑独特の景観を生み出し、留守を預かる家族の生活、漁の無事や成功を祈る儀式、帰還を祝う伝統行事など漁業に纏わる独自の文化が形成されてきた。

このように唐桑半島は独自の伝統文化を形成しながら発展してきた歴史を持つが、近代化が進む中で若者は都市部の便利で快適な生活を求めて唐桑から出て行く傾向が強くなり、唐桑は急速に高齢過疎化が進む地域となった。そして現在は地域の活性化が大きな課題となっている。

地域から若い人口が流出していくのは仕事や生活面での便利さを求めるという側面がある一方で、唐桑のまちづくりの在り方に起因する面もあると考えられる。今まで唐桑では、地域の課題を体系的に行政側へ共有していくような仕組みが整っていなかった。そのため住民と行政がそれぞれ別な動きの中でまちづくり活動に取り組むこととなり、経済力も経験も乏しい若者は自分たちの意見や希望を将来のまちづくりに反映していくことが難しかった。一方で、行政主導のまちづくり計画は伝統や文化、自然など地域の魅力を十分に取り入れることが出来ず、住民も愛着を感じられないものとなっていき、特に2006年に唐桑町が気仙沼市と合併して気仙沼市唐桑町となった後は、住民は行政との間にさらなる距離感を感じることとなっているという。

このような背景から、住民の中には地域をよくしていきたいという気持ちがありつつも、それを地域のまちづくりにつなげるまでにはハードルを感じることが多かった。また住民間で地域の課題が共有されても、どのようにその課題が解決していけるのか、行政へはどんな協力を要請することが出来るのか、そのような話し合いを行う場が限られていた。特に若い世代は自分達のまちづくりへの参画の方法が分からず、一方で地域の有する伝統文化や資源の魅力に接触する機会も乏しく、結果として学校卒業後には都市部の生活に憧れて町を出て行く傾向を強めていると考えられる。そして地域の活性化に必要な若い人材がいないために地域がますます元気を失っていくという悪循環が生じている。

しかし復興後のまちづくりは、道路、施設、公園などハード面の計画から環境・美観の保全、地域福祉、集団移転後の生活環境整備などソフト面にまで、実に将来の唐桑の町を決定づける重要な場面であり、唐桑の誇ってきた伝統や文化、自然資源や人のつながりが地域に残っていくためには、今まで以上に住民が主体的にまちづくりに参画していくことが求められる。中でも将来のまちづくりの担い手となる若い人材の参与が大きな鍵となる。そのためには住民、特に若い世代が地域の魅力について再認識し、自分達の描くまちづくりに主体的に関与しやすい仕組みや機会を創出していくことが必要である。併せて住民と行政が協働で地域の課題に取り組んでいくための体制を整えていく

	ことも求められる。 ●パートナー協働事業の内容 　当事業では、住民が地域の魅力や課題を共有し、将来のまちづくりに主体的に参画していけるような基盤づくりを行っていく。具体的には、①「地元学」（※１）の手法である「まちあるき活動」を取り入れることによって、住民が外部の視点を借りながら地域の魅力や課題を再認識し、それを住民間で共有していく機会の創出と、②住民たちが行政を交えながら地域の課題を分析し、今後のまちづくりに活用していくため協議を行う場の提供を行う。 ①まちあるき活動による地域課題の共有 　現在市内各所で「復興まちづくり」の取り組みが徐々に始まっているが、唐桑においても今後のまちづくりに地域住民の視点が反映されていくことが重要である。その取り掛かりの第一歩として、まずは地域の人々が唐桑にある歴史や文化、食や自然の魅力を再認識する機会作りとして「まちあるき活動」を実施する。 　「まちあるき活動」は毎回地区やテーマを設定し、地元からは有志の参加者を募り、外部からはからくわ丸の別事業である復興支援ボランティアから参加者を集めて、2-4くらいのチーム（1 チーム 5－6 人）を編成して実施する。1 日目はまちを実際に歩いて、出会った人へのインタビュー、土地の食を味わう、季節の自然の観察など地域の情報収集活動を行い、2 日目はワークショップ形式で、「まちあるき活動」で得られた情報を集約し、地図や模造紙に視覚的に記録して発表を行う。発表の場にはまちあるき活動に参加しなかった地域住民の方々にも広く参加いただき情報を共有していく。事業期間中には全 2 日間の活動を 3 回実施することを予定している。「まちあるき活動」を実施する前にはテーマ設定から活動計画つくり、住民の方への周知、参加者の募集と取りまとめなど事前準備を行い、活動実施後は「まちあるき活動」の成果をまとめて参加者や協力してくれた地域の方々へ報告したり、公民館など公共施設に展示する形で地域に公表する。また、得られた個々の発見は「情報カード」にまとめ電子化して今後活用できる形に保存しておく。 　なお、「まちあるき活動」が具体的に地域のまちづくりにつながっていくためには、専門的な視点からの助言や誘導があることが望ましく、当事業においては準備段階からワークショップの取りまとめ、公表の仕方などは地域づくりの専門家に入ってもらいアドバイスをいただきながら進めていく予定である。 　災害後から今まで、からくわ丸は「まちあるき活動」を 4 回実施しており、今年 8 月には気仙沼市主催の「夏休み子ども市民大学」において、他の NPO と連携する形で気仙沼市 4 地域（大島、唐桑、本吉、気仙沼）の「まちあるき活動」を実現している。そうした実践の経験は今後の活動においても非常に有用であり、さらに専門家の視点が加わることでより活動が効果的になることが期待される。また、これまでは活動の成果が地域で共有されることに目標が置かれてきたところ、当事業では活動の成果を今後の

	唐桑のまちづくりに活用していく段階にも重点を置いており、次のコンポーネント②の活動につなげていくことを念頭に入れて活動に取り組んでいく。 ②地域の課題に取り組む場と仕組みづくり 　①の「まちあるき活動」で得られた情報が今後のまちづくりへと有効に活用されていくために、今後唐桑の地域づくりを担っていく若者世代を対象に地域づくりについて検討を行う場を提供する。検討内容は「まちあるき活動」による情報を軸にしながら、彼らの普段抱いている意見や問題など、唐桑の地域づくりに関わる内容を拾い上げていく形で行う予定で、ファシリテーターには全国の他の地域ですでに地域づくり活動を実践している先駆者の方々に協力いただくことを検討している。対象となる住民は、唐桑で地域づくりに関心のある若者世代を中心に 10 名程度で予定しているが、参加希望があれば枠に捉われず受け入れていく。特に「まちあるき活動」に参加／協力していただいた住民の方々には積極的に参加を呼びかける。開催時期は「まちあるき活動」後地域の情報が集約される毎に行うほか、ニーズがあがればそれに応じて実施していき、まずは住民間で課題を解決する方法を検討していく。そしてファシリテーターとして協力いただく先駆者の方々から助言を受けながら、その解決策が具体的に実現されていくための活動計画を皆で考案する。加えて、検討に参加するメンバーから有志を集めて地域づくりの先進地視察も行い、他のまちの地域活性化の取り組みから知見や刺激を得てくる。視察先は東北近辺を視野に入れており、山形県羽沢村が現在候補に挙がっている。 　一方、公共の課題や行政絡みの問題などについては、別途行政の方々に参加いただきながら住民と行政が協働で問題について検討する場を設ける。すでに唐桑公民館、唐桑教育センター、市のまちづくり推進課の方々には活動に関して理解いただいているほか、8 月に気仙沼市が主催した「こども市民大学」ではまちあるき活動が取り上げられ、からくわ丸は唐桑代表 NPO として協力している経緯から、行政からの参加協力も得やすい立場にあると言える。さらに気仙沼市観光戦略会議の作業部会にはからくわ丸のメンバーも部会員として加わり、事業で得た成果を作業部会や観光課とも共有していく予定である。 　これら一連の活動を通して、地域の課題が地域住民で共有／検討され、行政も交えて課題解決に向けて取り組む体制を構築し、今後唐桑において地域住民が主体的となる復興まちづくりの基盤を固めていくことを目指す。 （※１） 　「地元学」は地元に学ぶというもので、地域にあるものを探し、地域の持っている力、人の持っている力を引き出し組み合わせることで、地域の活性化へと役立てていくことを目的としている。水俣病問題で長年地域が分断されてきた水俣市が、住民協働で地域を調べたことが前向きなまちづくりに発展し、町全体が元気を取り戻した中から生まれたものであり、敢えて特定な進め方が定められていない。 　地元学の中で頻繁に用いられるのが地域内外の人間が一緒に地域を歩く「まちあるき活動」で、地域の住民にとっては「あたりまえのもの」だったものが、外部の視点を取

	り入れることで新鮮で価値の「あるもの」として再認識される契機となるほか、住民同士で地域の課題や問題点を共有するツールとしても幅広く活用されている。 　隣の岩手県では平成 17 年から県が地域振興に地元学の活用に取り組んでおり、宮城県では旧宮崎町（現加美町）や宮城野区において先進的な事例がみられる。 ●期待される効果 　「まちあるき活動」では地域外の人間が参加することで地域の魅力を再発見出来るほかに、地域住民が自信や誇りを抱くようになる、年配の方が若い世代との交流で元気になる、住民たちが「地域を守り育てて行く当事者」としての自覚を強める、など意識面や精神面でも地域の活性化に大きな効果がもたらされると期待される。加えて、参加者を含め地域の住民が、外部の視点からの発見を身の回りの生活改善や自身の事業コンテンツに取り入れていくなどステップアップにつながる副次的効果も予想される。 　また、地域住民で地域の課題について考え意見を地域づくりに反映させていくことは、地域住民がまちに愛着を持ち、持続的なまちづくりにつながっていくと期待される。

事業内容(事業種別（コンポーネント）ごと)	裨益者（誰が、何人）
①まちあるき活動による地域課題の共有 ・まちあるき活動の計画と準備 ・地域住民への周知と協力の呼びかけ ・まちあるき活動及びワークショップの実施 ・活動で得られた成果の地域への公表とデータ化 ・上記活動に対する地域づくり専門家への協力要請	まちあるき活動参加者 ・唐桑住民 約 30 人 間接的裨益者 ・唐桑住民 約 7,000 人
②地域の課題に取り組む場と仕組みづくり ・地域住民で地域の課題について協議する場の提供 ・先進地視察の準備と調整 ・行政など公共機関との連携体制の構築 ・上記活動に対する地域づくり専門家への協力要請	課題協議参加者 ・唐桑住民 約 15 人 間接的裨益者 ・唐桑住民 約 7,000 人